『集量論 *Pramāṇasamuccaya*』と『量評釈 *Pramāṇavārttika*』との関係

——尊者ケードゥプ著『量評釈の大註釈・正理大海 *Tika chen Rigs pa'i rgya mtsho*』より——

白館戒雲
（ツルティム・ケサン）

仏教論理学・認識学は、ディグナーガ（Dignāga. 陳那　四八〇—五四〇頃）の『集量論 *Pramāṇasamuccaya*』などの著作により体系化されて、ダルマキールティ（Dharmkīrti. 法称　六〇〇—六六〇頃）の『量評釈 *Pramāṇavārttika*』などの著作により実質的に完成されたとされたことは周知の事実である。近現代の仏教学においては、両者の思想についてそれぞれの成立の契機ともなった仏教内外の思想的背景との対比の面からも、その特徴、独自性が指摘されてきた。特に『集量論』から『量評釈』への発展に関しては、前者と後者の違い、各自の独創性が強調されてきた。すなわち、後者[補①]が証因を果・自体・非認得の三種類に区別して明示する点などが注目されており、『量評釈』の「自己のための比量の章」に関しては、『集量論』と無関係の単独の著作とまで言われてきた。一方、筆者の受けたチベット、ゲルク派の教学においては二人の思想は基本的に一致するものとされている。この理解は、カシュミーラ出身でヴィクラマシーラ大僧院の最後の学頭として、イスラム軍による破壊を避けてチベットに入って、『量評釈』学習の伝統をもたらしたシャーキャシュリバドラ（一一二七—一一二五）、それを受けたサキャパンディタ（一一八二—一二五一）、ツォンカパ（一三五七—一四一九）などが代々、伝えてきたものである。その是非はともかく重要なのは、ディグナーガ、

ダルマキールティという論理学の開祖二人の思想と関連を適切に把握することである。

以下に翻訳するのは、ツォンカパの高弟ケードゥプ（mKhas Grub dGe legs dpal bzang. 1385-1438）の、因明における大著『量評釈の大註釈・正理大海 *Tika chen Rigs pa'i rgya mtsho*』より、両者の内容と対比を記述した部分である。ここには、二人の代表作『集量論』と『量評釈』の章立てと内容、特徴が比較検討されており、各々の著作の必要、目的に関して、的確な把握と成熟した思考が展開されている。それは著作の動機や目的について相補的、有機的な関連を浮き彫りにするものである。このような伝統的教学のすぐれた成果の一端を紹介したいと願い、ここにその部分を紹介する。テキストは IHa-sa edtion. Toh No. 5505 [A] Tha 23a4-32a3 を底本としており、拙著 *rGya gar gyi Tshad ma rig pa'i lta grub 'phel rim dang Tshad ma rig pa'i lo rgyus*（日蔵仏教文化叢書Ⅷ、西蔵仏教文化協会　二〇〇四）pp. 66-79 において扱った部分である。

和訳

もしこの論書（『量評釈』）こそを『集量論』の評釈として著作するのなら、『集量論』は六章あるのではないのか、どうしてここには四章にしたのかというなら、過失はない。『集量論』の〔第４章〕「譬喩の観察〔の章〕」と、〔第５章〕「遮詮（アポーハ）の観察の章」の二つは、「自己のための比量の章」に含まれているので、ここには「自己のための比量の章」の中に含めて決択したのであるし、〔第６章〕「誤難の観察〔の章〕」は「他者のための比量の章」に含まれているが、そのことは『論争の方軌 *rTsod rigs, Vādanyāya*』（D No. 4218 Che）に広汎に決択したので、ここには直接に説いていない。しかし、（**Tha 23b**）決択されるべきおもなもの―解脱と一切智、および道をあわせたものを、『集量論』には帰敬偈で説いてから六つの章により、そのものを自己が証得する方便と、他者に説く方法、および支分をあわせたものを、説明したのである。ここには、決択されるべきおもなもの―解脱と一切智、および道をあわせたものを広汎に決択したのを通じて、『集量論』の帰敬偈の半分そのものを註釈するにあたっては、「量成立の章」を別に造

られたので、四つの章になるのである。

そのようなら、この論書の四章の数の決定はこうである。自他が証得すべき義のおもなもの—解脱と一切智、および道をあわせたものに決定しているし、それも表面が見える〔凡夫の〕現量により眼により色を見るのと同じく、直接に決定することはできないので、直接に比量により決定することが必要である。比量そのものの所依の論拠の三相そのすべても、究極的には現量による成立を通じて決定する量—現量の究竟したものが必要である。そうでないなら、比量のみの展転したものが必要なら、無窮になってしまう。ゆえに、決択されるべきおもなもの—解脱と一切智、および道をあわせたものこそを、自己が証得する方便は、現量（**Tha 24a**）と比量の二つに数が決定するし、自己が証得してから他者を摂取するのなら、自己がそれに依って証得するところの論拠こそを直接に説く器にふさわしくする方便は、顕わになった誤解を抑えこむ論破、そして器にふさわしくなってから知りたいと欲する希求を持った者に対してまさにその論拠を説く教誡の自体は、他者のための比量と、〔合計〕二つに決定するの〔である。である〕から、それらを決択する章もまた、この四つに数が決定するのである。

では、〔『量評釈』[①]の〕これら四つの章の順序の決定はどのようなのかというと、軌範師『荘厳』の著者〔プラジュニャーカラグプタ〕に従うヤマリ（Yamari）はいう[②]—「第一に決択されるべきおもなものは「量成立の章」を説かれたし、まさにそれにより量一般の定義と、解脱と一切智、および方便をあわせたものを説くが、それら定義を具えた量の区別もまた幾つ有るのかというと、〔『集量論』に[③]〕「現量と比量」と説かれたように、現量と比量との二つに数が決定する」と、成立させてから、現量を広汎に決択する「現量の章」こそをその後に説かれている。

では、その比量もどのようなものをいうのかについて、〔『集量論』に[④]〕「比量は二種類。自己のための〔比量〕は、三相の証因から義を見るものである」、「[⑤]他者のための比量は、自己が見た義を明らかにする」と説かれているのに順じて、その比量もまた、自己が所証を証得する（**Tha 24b**）方便—自己のための比量、そのことを他者に理解させる

方便―他者のための比量の二つに区別して、「自己のための比量の章」をその後に説かれたし、他者のための比量の章は終わりに説かれた。

それも区別のもと（dbye gzhi）は区別の前に決定することが必要であるし、決択されるべきものが何なのかを知らないなら、その量の二種類は決択するものと知らないので、「量成立の章」を初めに説かれたし、欺かないことを定義として具えた量のみを、区別のもとにしたうち、区別されたその量もまた、現・比二つに数が決定している〔。その〕うち、現量は初めに生ずる量であるし、比量は後で生ずるものなので、生ずる次第に順じて、「現量の章」を初めに説かれたし、〔「自己のための比量」と「他者のための比量」という〕二つの比量章は、その後で説かれた。二つの比量についても、自己が決定していなくて、他者に説くことはできないので、「自己のための比量の章」を前に説かれたし、「他者のための比量の章」は後で説かれたのである。そうではあるが、「自己のための比量の章」が初めに現れるのは、軌範師〔ダルマキールティ〕が、そのことを証得することが難しいのをご覧になって、初めに出して註釈をなさった〔。である〕から、ゆえに経函が住する順序ではあるが、本文を著作した順序ではない。

では、帰敬偈と著作宣誓が、「自己のための比量の章」の冒頭に出ているのはなぜなのかというと、〔『量評釈』に、[6]〕「分別の網を除去し」などというのと、「ほとんどの人は」などというのは、『自註釈』の帰敬偈と著作宣誓であるし、本文（**Tha 25a**）根本偈の帰敬偈と著作の宣誓は、「量成立の章」の冒頭こそに、『荘厳』著者の註釈[7]に提示された「量となった[8]、衆生を益することを欲する、教主・善逝・救護者に帰命する。悪しき論理学に迷乱した衆生を大いに憐れむので、量の成立を如理に説明しよう」ということがそのことである」と言う。ラヴィグプタ（Ravigupta）はいう[9]―この論書〔『量評釈』〕こそは本文全般の評釈であるが、『集量論』のみの評釈ではない。けれども、章の順序について、デーヴェンドラブッディ（Devendrabuddhi）[10]は錯乱はない。このように初めに「自己のための比量の章」、次に「量成立の章」、次に「現量の章」、次に「他者のための比量の章」と言う。

『荘厳』著者の思惟は前者である。すなわち、『荘厳』[11]に「自己のための比量の直後に、他者のための比量を述べた。他者のための比量は、自己のための比量が先行するものであるから」と説かれたし、「量成立の章」の冒頭に[12]「正しい量であり、衆生を益することを欲する」などと提示してから、「[13]これについて論書の初めに、世尊は因と果が円満なので、正しい量だと讃えて述べた」などということにより、その意味を説明したし、そのような世尊に帰命して、「「量の成立」を説明しよう」と説明した直後（**Tha 25b**）から、「[14]量は欺かないもの」などという説明に入るからである。

もし、そのこと―『集量論』の帰敬偈と著作宣誓の偈頌を提示してから、その意味を説明したのではないのか、というなら、

その二つは同様ではない。『集量論』[15]の初めに、「量になった、衆生を益したいと欲する、教主・善逝・救護者に帰命して、量だと成立させるために〔『正理門論』など〕自己の本文すべてから、集めて様々な断片をここに一つにしよう」と出ているから。『荘厳』著者は、章の順序をそのように主張なさったが、この論書こそは『集量論』の評釈だと主張なさらない理由を、私たちは少しも見ない。そのような理由は誰も提示できない。「聖教一般の評釈であるから、『集量論』の評釈ではない」と言うことは、相違（矛盾）した遍充である。『集量論』こそが、聖教すべての増上慧学と註釈の諸分をおもに決択するからである。「聖教一般の評釈である」ということも、大小乗の蔵に説明された三乗の道次第を説くのみを言うのなら、妥当である。しかし、大小乗の蔵すべての意趣註釈であるので、この論書は大小乗両者の共通の典籍だと取るべきではない。説明されたような章の順序もまた、妥当ではない。軌範師〔ダルマキールティ〕が『自註釈』に、自己のための比量を初めに説明（**Tha 26a**）する理由を説かれたのと相違（背反）するからである。よって、軌範師デーヴェンドラブッディとシャーキャブッティのご主張のように、初めに「自己のための比量の章」を説明するのは、軌範師の意趣であるので、ここにはそれと同じく説明しよう。

そのようにまたすなわち、もしあなたはこの論書は『集量論』の評釈として著作するなら、そこには初めに「現量の章」、次に「自己のための比量の章」、次に「他者のための比量の章」、次に「喩と似喩の観察の章」、次に「遮詮（アポーハ）の観察の章」、次に「誤難の観察の章」が出ているが、ここには順序が逆転されている。なぜ「自己のための比量」を初めに説明するかというと、

そのことの答えを説くために、軌範師〔ダルマキールティ〕は『自註釈』[16]に、「利と非利の弁別は、比量に依るものであるから、それについて誤解するので、それを確立するために、説明する」と説かれているし、この意味は、シャーキャブッティ[17]が判釈を通じて決択した義はこれである。もし利と非利の弁別は比量に依っているから、比量を初めに説明したのであるなら、それも、利と非利の弁別は比量のみに依っているからと言う（Tha 26b）のか、利と非利の弁別のみが比量に依っているからと言うのか。

第一〔の立場〕は妥当ではない。それらの弁別は、現量にもまた依っているからからである。よって、『量決択』[18]に、益と非益を得るのと捨てるのは、必ず正智―現量と比量の両者を待つことを説明しているのと、内的相違（矛盾）になる。

第二の立場のようなら、利と非利の弁別のみが比量と現量に依っている・依っていないの区別は無いので、その理由を通じて比量を初めに説明するなら、現量もまた初めに説明することが道理となるはずである。

もし確定的な区別を適用しなくて、義利と非義利を弁別するのは、比量にもまた依ったものなので、ゆえに初めに説明したのであるなら、現量もまた初めに説明することが道理となるはずである。義利と非義利の弁別は、現量にもまた依るのであるからである、というなら、

説明しよう。この論書においては、教主とその教えは過失が無いことを論証したのを通じて、解脱と一切智および方便を、無顛倒に決択するのであるが、それらも表面を見る〔凡夫の〕現量により直接に決定することはできないの

で、比量により直接に決定することが必要であるし、それについてもまた比量そのものの定義と論証因などについて顛倒に語る者が多くある（Tha 27a）ので、それらを除去した。それらの設定を無顛倒に軌範師ディグナーガが『集量論』に説明したのも、きわめて証得しがたいのをご覧になったし、決択する比量と論証因などについて誤解を除去しなくては、それらを正しく証得できないし、決択する方便を正しく証得しなくては、その方便に依って決択される義を決定できないので、ゆえに解脱と一切智および道をあわせたものを証得することは、究極的には現量に掛かっているが、直接には比量のみに掛かっているし、それについての誤解を除去していなくては、それに依って決択する義それらを決定できないことをご覧になって、軌範師「ダルマキールティ」は最初に「自己のための比量の章」こそを説明なさった。そのように目的に関して「自己のための章」を説明した後に、その比量により決択されるおもなもの—解脱と一切智および方便をあわせたものを決択するものである「量成立の章」を説かれた。この二つは、方便と方便所生の次第である。その方便に依って決択される義それらを決定することもまた、その比量の所依・論証因の三相すべてが現量により成立したことに掛かっているのを通じて、現量を究竟としたものであるから、その後に「現量の章」を説かれた。そのように自己が教主とその教えは過失が無いことを量により決定してから（Tha 27b）そのことを他の教化対象者に説くのではなくて、自己が決定していなくては他者に説くことはできないので、ゆえに他者を摂取する方便を説く「他者のための章」こそを終わりに説かれた、というのが、諸章の順序の決定である。

では、「自己のための比量」を説明するのであるなら、その定義と区別などを示さなくて初めに論証因の定義と区別などを説明したことにより、どうするのかというと、他の人たちはいう—因の論証因を決択したのを通じて、果の比量を間接的に説明するのである、と言う。

私はそのように語らなくて、よってこの論書こそに依って『集量論』の義を評釈したいと欲する人たちに、少しの口訣を施そう—すなわち、『集量論』に直接に説明されおわった定義と区別の異門など『同論』に、他に説明される

べきことがないものたちは、そこに説明しおわったことにより、言葉の集まりを省くために、そして根本偈（『集量論』）・註釈（『量評釈』）が重複した過ちを捨てるために、この書（『量評釈』）にはそれらを重複させて語るのではない。けれども、（『集量論』）そこに説明した定義の言葉の端の断除と断定の必要と、諸区別の数の決定と、数の決定についての論争の排除など、その『経 *mDo*』（『集量論』）に直接に説明されていなくて、説明することが必要であるものそれらすべてを、この書（『量評釈』）に説明するのである。例えば、〔『集量論』に〕[19]「他者のための比量は、自己が見た義を明らかにする」といって、他者のための比量の定義を直接に説きおわっているので、そのことをここには重複して語らずに、その（**Tha 28a**）定義の言葉の端の断除と断定の必要と、それら必要を成立させる正理などそこに直接に説かれたものたちを、この書（『量評釈』）において広汎に説明した。そして、「自体など五つの法をそなえていると説くべきことは、他者のための所証の定義である」と直接に語らなかったし、そのように『集量論』[20]に説明しおわったことにより、ここには五つの言葉そのものの断除と断定の疑いと、必要そのものを成立させる正理など『経』（『集量論』）に直接に説かれなかったものたちを、広汎に説明する。そして、〔『集量論』に〕[21]「名と類などを適用する分別を離れたものが、現量」と説いてしまわれたので、そのことを重複して語らずに、現量は分別を離れたものだと成立させる正理を、『経』に広汎に説かれていなくて、ここに広汎に説明したことなどのようなもの、そして『集量論』[22]に、「現量と比量が量である。二つの定義が所量においてされるから。他の量は無い」という根本偈・〔自〕註釈により、量と〔量られる〕所量の数の決定、そしてその数より他の数に分別するのを否定する方法の僅かほどを説かれたそのことを、ここには広汎に説明した。そしてまた『集量論』[23]に、宗法を持ったもの九つの論証式の実例として述べたのと、それらが同品には能遍、異品には二分として起こるのと、異品には能遍、同品には二分と、両者には能遍として起こることと、両者に二分に起こることなどの諸々の差別を、直接に明らかに（**Tha 28b**）説かれた「。である」から、そこに説明しおわったことに関して、ここにはそれらを直接には提示していなくて、宗法をもったものを

九に区別した必要と、その九より他の実例として述べることを直接に説かれなかった理由ほどを、広汎に説明するようなものである。

同じく、『集量論』に直接に説かれなかったし、説明することが必要な諸々の定義は、ここに直接に提示する。例えば『集量論』には、量の区別ほどを説かれてから、量一般の定義を直接には説かれなかったので、ここには補足した。〔『量評釈』[24]に〕「量は欺きのない知識」と説明したようなものである。同じく量は『経』（『集量論』）に、他者の主張を明示してから、そのことを否定する正理の要略のみを説かれたものについて、そこに提示しおわったことに関して、ここには他者のその主張を提示しないで、その侵害を広汎に説明するのである。例えば[25]、ニヤーヤ学派の立場の正しい宗（主張命題）の定義と、似非の宗（主張命題）の実例を否定する場合などのようなものである。同じく自己の何らかの主張する宗（主張命題）の義を明示していなくて、それを能証する正理を説かれたものについて、初めに自己の立場において宗（主張命題）そのものの義を明示してから、それを能証する正理を広汎に説明するのである。例えば、知慧の二とおりの対象を明らかに直接に説かれていなくて、それを能証する正理の門のみを説いたが、ここ〔『量評釈』〕には[26]「諸々の境から生じたのである」などということにより、所証である知慧の二とおりの対象を明らかに説明したのを通じて自己の立場（Tha 29a）の宗（主張命題）を最初に提示した。その後に、それらを能証する正理を広汎に説明したようなものである。『経』（『集量論』）に他者の主張とそのことへの侵害、他の辺を否定する正理のほとんどを、明らかに直接に説かれてから、疑いの辺各々ほどを直接に提示していなくて置いたそれらについて、そこに直接に説明したそれらすべてを、ここに提示しなくて、およそ直接に提示していなくて置いた辺それこそを否定する正理を、ここに補足して説明するのである。例えば、〔『量評釈』に[27]〕、「和合が所証であっても」などという場合のようなものである。およそ『集量論』に前主張とそのことを否定する正理との両者を広汎に説明したそれらは、ここには説明しない。例えば[28]、「ニヤーヤ学派の者たちは、前者を持った〔比量は三種類〕」などという証因の他の相

（tshul）を論ずる彼らの前主張と、それを否定する正理との両者は、『量の経』（『集量論』）に広汎に説明しおわったし、「[29]サーンキャ学派の者たちが関係は七種類有るうち、可能性のある関係一つにより現量より勝れたものが成立したのが、比量」などという前主張と、否定する正理との両者の明らかで広汎なのは、『量の経』に説明しおわっているので、ここにはそれらの前主張と、それを否定する正理との両者を説明していないようなものである。

同じく、自己の立場の諸々の能証についても、『経』に広汎に説明しおわったものたちは、ここには説明しないし、そこに説明していないもの（Tha 29b）たちは、ここに説明するのである。例えば、煙により、煙をもった山に、特定の火が明らかであり、燃えることなどは能証でないが、ただの火ほどを理解させるものである、という能証は、『量の経[30]』に「対象の多くの法は、すべて証因から証得されるのではない。他の関係から、遮止を証得させるのである。火の燃えることと鋭いことの差別のとおり、それらが煙から証得されるのではない。錯乱であるから」などという根本偈・註釈により、広汎に説明しおわっているからである。

ここ（『量評釈』）にはそれら理由を詳細に直接には説明していないし、『量の経[31]』には、「例えば、造られたことが有るのは無常において有るように」などということの根本偈・註釈により、自性の証因の義についての判釈を要約したものほどを説かれたが、自性の証因の論証式の差別の実例として述べたのと、関わりの無い侵害をもった証因などは、ここに補足して、広汎に説明したようなものである。およそ『集量論』にまさにその義を広汎に説明したが、説明する言葉が堅固なので、証得しがたい何らかの処については、『経』そのものの語義を広汎に説明するのを通じてもまた註釈をする。例えば、「何らかにおいて共通でないから、比量は無い」などという『経』（『集量論[32]』）の語義は、〔『量評釈』に[33]〕「それを否定するのは比量からなる」などということにより、広汎に説明するようなものである。「およそ『量の経』（『集量論』）に、その義こその体ほどを説かれているが、その定義とそれに対する他者の非難を排除する必要・どのように除去するかの仕方など（Tha 30a）広汎に説かれなかったものについては、ここ（『量評

釈』）にそれらすべてを広汎に説明するのを通じて、註釈するのである。例えば、『経』（『集量論』[34]）に「意もまた義と」ということほどしか説かれなかったことについて、ここ（『量評釈』）には、意の現量は無いと論争する他者の非難をよく排除したし、「[35]ゆえに根の識は」などというのを通じて、因と境の差別により意の現量の定義をあわせたものを説明したようものである。

ゆえに、まさにこの本文を説明したいと欲する者たちが、『集量論』の義を理解してから、そのこととこの本文の根本偈（『集量論』）・註釈（『量評釈』）を結合させる口訣の小分ほどを説くこのような門を通じて、まさにこれは『集量論』の評釈にどうしてなるのかのなり方を、詳細に観察した。

概略のみに留まらなくて、『経』（『集量論』）の本文に適用して、『集量論』に定義を提示しおわったものたちは、ここには提示しなくて、その定義の言葉の端「について」の断除・断定の必要などをここには広汎に説明することと、さらにここには区別のもとの或るものについて区別を説明したし、或るものについては説明しなかったことと、表示されるもの（所相）の或るものについては表示する定義（能相）を直接に提示し、或るものについては直接に提示しなかったものは、『経』に区別を広汎に説かれたものたちは説明しおわったことにより、ここには説明しないし、そこに説明しなかったものたちはここに説明することと、そこに定義を直接に提示したものたちはそこに提示しおわったことによって、ここには提示しないし、そこに提示しなかったが、提示することの必要な或るものは、ここに提示するのである「。である」から、それを通じた相違（矛盾）は（Tha 30b）無いことを知るべきである。そして、ここに否定の対境「である外道者」を提示していなくて否定を広汎に説明したことと、論争を排除する対境を直接に提示していなくて論争の排除を広汎に提示したことなども、同様に知って、『経』（『集量論』）そのものに余りを探して、善説すべきである「。である」が、軌範師（ダルマキールティ）が『経』（『集量論』）そのものの論争の排除などに提示したものについて、そのように知らなくて無関係の知により造った様々なものごとにより、本文の義を説明する捏造

をすべきではない。

よって、ここにまた『集量論』[36]に「〔比量は二種類。〕自己のためのものは、三相の証因から義を見るものである」といって、自己のための比量の定義は、三相の証因から所証を証得することだと明らかに説明しおわっているので、そのことをここには重複して語るのではない。『量の経』（『集量論』）に自己のための比量の定義を説明したその後に、「三相の証因から」といって説いたそのことを説明すべきである。[37]「比量されるべきものとその同類には有ることと、〔同類で〕ないものには無いことが、決定する」といって、三相個々の定義を示してから、正しい証因のみの定義を直接に示さなかったので、ゆえにここには、正しい証因の定義を直接に示すし、『量の経』に、三相個々の定義を説明しおわったことに関して、ここにはそれらを直接に説明しないで『集量論』に、それらの定義の端に「決定する」を語られたことの必要を確認することのみをなさった。

同じく、『量の経』には、他者のための比量を説明する場所に、論証因の区別は宗法をもったもの九に区別したほどを説かれたが、正しい証因について果・自体・非認得の三つに区別してから、それらに数が決定する（Tha 31a）数の決定の設定は『経』に直接に説かれなかったので、ここにはそのような数の決定の設定を広汎に説明するのである。そのような区別個々の体を決択することについてもまた、『集量論』には、自己のための比量の定義を示す場所から派生して、果の証因の論証式と、まさにそれにより所証をどのように能証するのかなどの設定、および正理をあわせたものを、広汎に説かれたので、ここにはそれらを広汎に説明しないし、自性の証因の論証式の区別と、同品遍充と異品遍充を能証する正理などは広汎に直接に説かれなかったので、ここにはそれらを広汎に説明するし、果の証因についても証因・法・関係・能証・因果を決定する量を、直接に広汎に説かれなかったので、ここにはそれらを広汎に説明したのである。『集量論』に宗法をもったもの九つの区別を説明するとき、果・自体の論証式の実例として述べた二つを直接に語ったことにより間接的に、因〔の非認得〕・能遍の非認得の証因二つが間接的に投げかけられ

たようなものと、ニヤーヤ学派を否定するとき、「[38]我が有っても、器にふさわしくないものには、我の非認得の証因により無我を理解させることができない」と説かれたことにより、現れないものの非認得と、現れるはずが非認得の証因の差別が間接的に投げかけられたようなもの以外は、非認得の証因の区別と、区別個々の体などの設定を直接に明らかに説かれたことは、一つも無かったので、ここには非認得の証因の（Tha 31b）区別と、区別個々の体などの設定を、広汎に説かれたのであるし、要するに『集量論』に「自己のための比量の章」に、その定義と三相個々の設定などは広汎に説かれたし、他の〔外道の〕人たちは六相と主張するなどの諸設定は広汎に否定したが、正しい証因一般の定義と、その区別三つの数の決定と、区別個々の体などの設定を直接に関係づけて説かれなかったので、ここにはそれらこそを広汎に説明したのを通じて、自己のための比量の所依—論証因について誤解を否定するのである。

そのように、論証因についての誤解を否定したことによっても、自己のための比量について誤解を除去することになる。所依—論証因を無顛倒に決定したなら、それに依った比量は容易に決定することになるからである。『集量論』に「自己のため〔の比量〕の章」に、自己のための比量の定義を説かれたが、区別を説かれなかったのは、所証の定義を説明する場所に、除去する量を四つに区別したものから、証得できることを思惟なさって説かれなかったのであるし、ここにもまた所依—論証因の区別を広汎に説明したなら、それに依った比量の区別は容易に証得できることを思惟なさって説かれなかったのである。

では、『集量論』には、説明が必要な多くの義を説明していないと見えるので、論書は過失の出来たものにならないのかというなら、『集量論』は利根の教化対象者・（Tha 32a）、要略を喜ぶ者たち・冒頭を語ったことで理解する者たちに関してであるから、直接に説明しなかったそれらも、直接に示したものの言葉の含意と、機会を得たことと、言葉の端と、意味により得られることとの適宜を通じて投げかけたものばかりであるから、過失は無い。そうであっても、そのことを後の鈍根の教化対象者のほとんどが証得しないのを証得させるために、まさにその義が内在してい

るのなどを明らかに出して、意味の得られたものたちを補足してから、明らかに註釈するこの論書（『量評釈』）こそを、造られたのである。

訳註

① 木村誠司「『量評釈』の章の順序について(1)」（1988）p. 44ff.

② 『荘厳の復註・極円浄 *Pramāṇavārtikālaṁkāraṭīkā Suparisuddhā*』D No. 4226 Phe 179a7-b1 の取意)。その奥書では著者名は Jamārī°；木村 同上「(2)」（1989）p. 19

③ Ce 1a3；*Dignāga on Perception* (Harvard Oriental Series 47, 1968) M. Hattori ed. p. 24, pp. 176-177；和訳 武邑尚邦『仏教論理学の研究』（1968）pp. 115-116；戸崎宏正『仏教認識論の研究 上巻』（1979）p. 57

④ Ce 4a1；北川秀則『インド古典論理学の研究』（1965）p. 73, p. 447；武邑（1968）p. 201

⑤ 『集量論』Ce 6a4；北川（1965）p. 126, p. 470；武邑（1968）p. 201

⑥ Ce 94a1, 2；Yūsho Miyasaka ed. *PRAMĀṆAVĀRTTIKA-KĀRIKĀ* (Sanskrit and Tibetan)（『インド古典研究 ACTA INDOLOGICA』(1971/72. 以下 PV (1971/72) と略称し、章立て、偈頌の数え方に用いる）pp. 2-3；S. Mookerjee and H. Nagasaki *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, An English translation of the first chapter with th autocommentary and with elabotate comments* [*kārikās I-LI*] (Patna 1964) p. 3；稲見正浩「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(1)」（『広島大学文学部紀要』51 1992）pp. 62-63）；桂紹隆「カルナカゴーミン作『量評釈第1章復註』和訳研究(1)」（『広島大学文学部紀要』54 1994）pp. 25-29

⑦ D 4221 Te 1a1-2；Vittorio A. Van BIJLERT *Epistemology and Spiritual Authority* (Wien 1989) p. 115

⑧ 『量評釈の荘厳』そのものには、「tshad ma yang dag 正しい量」と出ているが、ここには『集量論』(Ce 1a2；M. Hattori (1968) p. 23 note3, pp. 174-175；武邑（1968）p. 80）と同じく「tshad mar gyur pa 量となった」と提示している。cf. 宮坂宥勝「量評釈における Pramāṇasiddhi について」（『印度学仏教学研究』7－2 1959）pp. 527-529；岩田孝「世尊は如何にして公準（Pramāṇa）となったのか」（『駒沢短期大学 仏教論集』6 2000）pp. 17-18；袴谷憲昭「pramāṇa-bhūta と

Kumāra-bhūta の語義」（『駒沢短期大学　仏教論集』6　2000）p. 11）；拙稿「チベットにおける『アビダルマ集論』の研究」（『桜部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』2002

⑨ 『量評釈の註釈』D 4224-25, Pe-Phe. 直接的な記述は未確認であり、取意かと思われる。

⑩ 木村俊彦『ダルマキールティ宗教哲学の研究』（増補版　1987）p. 28

⑪ D The 123a4-5

⑫ D Te 1a1

⑬ D Te 1a5

⑭ D Te 2a5；岩田孝「世尊の量性の証明の一解釈―プラジュニャーカラグプタの解釈の視点から―」（『印度哲学仏教学』16 2001）pp. 47ff.

⑮ D Ce 1a2；M. Hattori (1968) p. 23, pp. 174-175；武邑（1968）p. 80

⑯ No. 4246 Ce 3a3；S. Mookerjee and H. Nagasaki (1964) p. 6；L. W. J. van der Kuijp (1979) notes. 40, 41

⑰ 『量評釈の復註』D No. 4220 Je 4b6-6a3 の取意

⑱ D 4211 Ce 152a2-4. 戸崎宏正「ダルマキールティの認識論」（『講座大乗仏教9　認識論と論理学』1984）p. 155；戸崎宏正「法称『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章　現量（知覚）論の和訳(1)」（『哲学年報』45　九州大学文学部　1986）p. 2

⑲ 「他者のための比量の章」D Ce 6a5；北川（1965）p. 126, p. 470；武邑（1968）p. 201

⑳ 『集量論の自註釈』D Ce 40a4-6；北川（1965）pp. 128-129, notes 164-167, pp. 471-472；武邑（1968）pp. 237-237, 註(2)(3)：〔宗は〕自体において説示する、〔立論者〕自己により欲されている。「自体を」といわれるのは、所証の体であるが、未成立から能証する体によってではない。同じく、成立していない証因と、似非譬喩も全く捨てたことを述べている。それらは、能証するにふさわしい体だと言うべきではない。「自己により欲されている」と語ったこれにより、自己の論書に関して承認していると説いているのである、そのことをもまた示している。」（傍線部は偈頌）

㉑ D Ce 1a4；M. Hattori (1968) p. 25, pp. 176-177；武邑（1968）p. 134

㉒ D Ce 1a3；M. Hattori (1968) p. 24 notes11-13, pp. 176-177；武邑（1968）pp. 115-116；戸崎（1979）p. 132

㉓ 『集量論の自註釈』D Ce 45b7-46a3（北川（1965）pp. 187-189, pp. 492-493；cf. 武邑（1968）pp. 249-250）に出ている。「それら宗法の九の実例を述べた順序通りに説こう。この九も九の目に順次に書いて図表により、縦に同品の三つ、横に異品の三つ、四方により自性と果などと知るべきである。「声は無常である。量られるものであるから」。「無常である。造られたから」。「無常であるから、努力より生じた」。「造られたから常である」。「常である。聞かれるものであるから」。「常である。努力より生じたから」。「無常であるから、努力より生じた」。「努力より生じたから無常である」。「常である。触れられるものではないから」、というもの—それらをまとめた偈頌は、「量られるもの・造られたと無常。造られたと聞かれるもの・努力より生じた。無常である、努力より生じた、触れられるものでない。その九が常などに対して〔因と似非因〕」などという。その意味は bsTan dar lHa rams pa の『宗法の輪の明示・宝灯 *Phyogs chos 'khor lo'i gsal byed Rin chen sgron me*』（Ca 4b2-5a2）に、「輪—提示されるべき宗法をもった論証因の九を確認することは、文字列三つの上部に順次に、「声—有法。常である。量られるものであるから」、「声—有法。無常である。造られたから」、「螺貝の声—有法。努力より生じた。無常であるから」、という三つを並べて提示すべきであるし、その三つとも同品に能遍として有るものが三つである。文字列の中間には同様に、「声—有法。常である。造られたものであるから」、「声—有法。常である。聞かれるものであるから」、「螺貝の声—有法。常である。努力より生じたものであるから」、という三つを並べて提示すべきであるし、その三つは同品に全く無いもの三つである。第三の順序もまた上のように、「螺貝の声—有法。努力より生じたものではない。無常であるから」、「螺貝の声—有法。無常である。努力より生じたものであるから」、「声—有法。常である。身体を持つものではないから」という三つを並べて提示すべきであるし、その三つとも同品が二種類に起こるもの三つである。そのように同品において能遍として有るものと、それに全く無いものと、それに二種類に起こると説明しているものの三つは、縦に読んだことに関してである。しかし、横に読むことに関してなら、異品に能遍として有るものと、それに全く無いものと、それに二種類に起こるものと三つもまた生じている」と説かれている。

㉔ *PV* (1971/72) pp. 1-2 k. 1；木村（1987）p. 32；V. A. Van BIJLERT (1989) p. 120；稲見（1992）p. 65

㉕ 『集量論の自註釈』D Ce 41b7-42a3；北川（1965）p. 139, pp. 476-477「ニヤーヤ学派の者たちはいう—宗（主張命題）が論証因と相違するのと宗（主張命題）と相違するというそれらは、宗（主張命題）の過失である。例えば、「声は常である。

そのすべては無常であるから」というようなものだ、と言う。宗（主張命題）が論証因と相違するのは宗の過失というのは道理ではない。ここにおいて宗と論証因として相違するという両者は道理ではない。どうしてかというと、よく学んでいない者たちは、それを異品の実例より述べるべきである。およそ論証因の論証式これが宗（主張命題）と相違するのを述べたことは、道理ではない。このように異品の実例の論証式こそによってであるから。」

㉖ D Ce 132b2 ; *PV* (1971/72) pp. 90-91, Ⅲ k. 368 ; 戸崎宏正『仏教認識論の研究　下巻』(1985) p. 54

㉗ 『量評釈』D Ce 186a2 ; *PV* (1971/72) pp. 186-187, Ⅳ他者のための比量の章 k. 169

㉘ 『集量論の自註釈』D Ce 32b2-36a1 ; 北川（1965）p. 369, p. 563 ; 武邑（1968）p. 211, pp. 101-103 ; 桂紹隆「インド論理学における遍充概念の生成と発展―チャラカ・サンヒターからダルマキールティまで―」(『広島大学文学部紀要』45　特輯号1　1986) p. 29

㉙ 『集量論の自註釈』D Ce 36a1-40a1 ; 桂（1986）pp. 23-24

㉚ 『集量論の自註釈』D Ce 30b3-4 ; 北川（1965）p. 112, p. 462

㉛ Ce 45a6 ; 自己のための比量の章 ; 北川（1965）p. 180, p. 490 ;「すなわち同品に有る造られたことなどは、無常などより他に苦などにも有るのである」

㉜ D Ce 40b6-41a1 ; 北川（1965）p. 130, p. 472 ;「何らかにおいて共通でないから、比量は有るのではないし、声において〔世間的に〕知られたことと相違する義を適用することは、「ウサギを持ったもの」は月ではない。有るから。というようなもの」

㉝ *PV* (1971/72) pp. 178-179, Ⅳ k. 114

㉞ D Ce 2a1 ; M. Hattori (1968) p. 27 note45, pp. 180-181 ; 武邑（1968）p. 188 ; 戸崎（1979）p. 337

㉟ 『量評釈』D Ce 127b5 ; *PV* (1971/72) pp. 74-75, Ⅲ k. 243 ; 戸崎（1979）p. 342

㊱ D Ce 4a1 ; 北川（1965）p. 73, p. 447 ; 武邑（1968）p. 201

㊲ D Ce 4a3 ; 北川（1965）p. 96, p. 455 ; 武邑（1968）p. 203 ; なお Se ra rje btsun pa の『第一品の難処の疑いを断つもの』(New Sera ed. Ka 56a6-b4) に、「では、軌範師ディグナーガが三相個々の定義を説明する言葉の端に「決定する」と述べられたその本文は何かというと、或る人は、比量されるべきものとそれと等しいものについては、有ると無いとに無いことは、

決定する」というこの本文がそれである、と仰った。或る人は、およそ両者によく成立したものが成立というその教証であると仰る。第一の立場は道理ではない。『経』の根本偈に三相個々の定義を説明するとき、「決定する」という言葉を直接に語らなかったからである。〔タルマリンチェンの〕『集量論の註釈 *Tshad ma kun btus kyi Tikka*』※①に、三相個々の定義の端に「決定する」ということは、根本偈の言葉により直接に示されていないが、適用することが必要であると知るためなのである、と説かれたからである。彼はいう―〔タルマリンチェンの〕『解脱道明示 *Thar lam gsal byed*』※②に「よって『集量論』に「比量されるべきものとその同類には有ることと、〔同類で〕ないものには無いことが、決定する」というこれにより、三相の定義を示すのである」と説かれたことと相違すると言うのなら、〔答えよう―〕過失はない。『集量論』と『量決択』※③に引用された本文の言葉には「決定する」という言葉が出ているのを意趣なさったのである。しかし、『経』（『集量論』）の根本偈にはそのように出ていないから。『経』の根本偈※④に、「比量されるべきものとそれと等しいものについて、有ると無いとには無い。これは因を知ることも得たこと。知らしめる〔証拠の〕場所に関するから」と出ているから。」

※① Toh No. 5437 Nga 39b6

※② Toh No. 5450 Cha 27b3-4

※③ D Ce 168b7 ; 赤松明彦「ダルマキールティの論理学」（『講座大乗仏教9　認識論と論理学』1984）pp. 200-201

※④ D Ce 4a3-4

㊳ D版で調査したかぎりでは確認できない。

補① これらの特徴について三種の証因と、その理由として本質的な同一関係と因果関係の二種の関係を指摘した重要な論文に、Steinkellner E. による次の論文がある。*Wirklichkeit und Begriff bei Dharmakīrti*, Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und asiens, 15, 1971 ; *On the Interpretation of the Svabhāvahetuḥ*, Wiener Zeitschrift für die Kunde-und asiens, 18, 1974 ; *Svabhāvapratibandha again*. Acta Indologica 6. 1984. cf. 赤松（1984）pp. 203-211

本稿は、文部科学省　平成一四―一六年度の科学研究補助金（基礎研究B(2)「中道の思想と実践―ツォンカパの中観哲学に基づく大乗の仏道の総合的研究」）の成果の一部である。
翻訳と関連論文の調査について藤仲孝司氏にご協力をいただいた。なお脱稿後に藤仲氏のご指摘により、本稿と関連する内容

のうち、『量評釈』の章立ての問題が、すでにE. Frauwallner, "Die Riehenfolge und Entstehung der Werke Dhamakīrti's", *Asiatica*, 1954 ; D. Malvania *Svārthānumāna-paricchedaḥ*, Hindu Vishvavidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series Vol. II, Introduction pp. 5-6 ; L. W. J. van der Kuijp "Introductory Notes to the Pramāṇavārttkika Based on Tibetan Sources" (*The Tibetan Journal* 4. 2, 1979) 12-18 に取り扱われていること、特に木村誠司「『量評釈』の章の順序について(1)」(『駒沢大学仏教学部論集』19 1988) pp. 44-45, 同『同(2)』(『駒沢大学仏教学部研究紀要』47 1989) p. 22 には、ケードゥプの同じ典籍 Tha 26a1-2, 26b5-27a5 と Tha 25a4-5 の翻訳とともに詳しく検討されていることを知ったので、参照されたい。